

ヒオドシチョウは西畑や松波町では見かけることが少ない珍しいチョウですが、幼虫がエノキの葉っぱを群れとなって食い尽くす習性があり、エノキは高砂小学校の大樹をはじめ近くにくらでもあるので、気づかないうちに身近で発生する可能性は十分あります。実際、2007年6月、高砂幼稚園の運動会当日、子供たちが走り回るトラック地肌にヒラリと舞い降りてきて、きれいな緋緘 (=武者が身につけた緋色の甲冑) 色を惜しみなくみせながら悠然と水分を吸い始めた、実に肝っ玉のおおきいこのチョウを目にしたことがあります。

ヒオドシチョウは5月中旬から6月上旬にかけてとても美しい新鮮個体が羽化して活動を始め、クヌギなどの樹液が大好きで、2013年6月にはタブノキの樹液を吸う光景を記録できました。越冬後以外にはあまり花には来ませんが、加古川市平荘湖の岩山でアセビに似たネジキの花蜜を求めている光景に出くわしたことがあります。終令幼虫まで群生し、ほぼ同じ場所でいっせいに蛹となる習性があるため、それらがチョウとなればあたり一面に飛び交うはずですが、幼虫が群生する習性があるため寄生バエにやられる確率が高く2割も羽化すればいいほうです。しかも羽化後は離散してその行動範囲も広く、身近に複数のヒオドシチョウを見ることは稀です。もっとも、自然が豊富に残る北海道富良野などでは密生するヤナギ類を食べて育った個体が、林道路面で複数頭競うように吸水している情景に出会えます。羽化後に



May 25, 1997 高知市五台山公園



遠くにいなくてもいい環境がすぐそばにあるからでしょう。富良野では観光客であふれる広大なラベンダー畑に飛来して、夢中でラベンダーの蜜を吸うヒオドシチョウも見ました。

このチョウは暑さが苦手な鹿児島島の北部が分布の南限。5月下旬から6月の短期間元気に飛び回ったあと夏場になると休眠に入り多くはそのまま越冬しますが、11月上旬の暖かい日中に日光浴を楽しむ姿を加古川市志方町で見たことがあります。長期間どこでどんな状態で休眠しているのか観察例はほとんどなく、春に再び活動を始めるときには、写真①のように多くが羽の外縁がみごとにボロボロに傷んだあわいな姿となりますが、なぜか♀は♂にくらべて傷みが少ないという文献記載があります。写真②はキタテハと落葉を囲んで「今年の春は暖かくていいね」などと仲良く語り合っているかのようなほのぼのとした光景の記録ですが、損傷が少ないのでこれは♀だと思われます。ヒオドシチョウの羽の哀れさはアカタテハ、ルリタテハ、キタテハなどが越冬後にほとんど無傷であることとあまりに差があり、相当に異なる厳しい越冬条件を耐え忍んだせいだと考えられます。スダ



ジイ根元の空洞で越冬していたという観察記録があるようですが、羽がひどく損傷する理由は不明のままです。



ここまでの記述ですでに気がついた方もいるかと思いますが、ヒオドシチョウは約1年の長生きをするチョウです。越冬後に初めて交尾をし、エノキの新芽が出る頃に50-100個以上塊状に産卵をすることが知られています。早春、カサカサという乾いた羽がすり合わさる音をたてながら日あたりのいい小高い山頂の広場でルリタテハ同様の占有行動をみせ、サクラの花蜜を求めたりもします。岩場で日向ぼっこをする写真①の撮影時には「冬場をよく耐えたね」と本当にいとおしくなりました。